

論文

「世界史」をめぐる闘争

——西洋史家・鈴木成高の「近代の超克」とその方法としての「西洋」

吉川 弘晃

はじめに

- 1 鈴木成高と「ランケ・ルネサンス」
 - (1) 西洋史学の危機と面目
 - (2) ランケ史学の再解釈：歴史主義
 - (3) ランケ史学への批判：ふたつの課題
- 2 「世界の一体化」をめぐる論争
 - (1) 高山岩男と「世界史の理念」
 - (2) 歴史家と哲学者の対決
 - (3) 対決のゆくえ
- 3 方法としての「西洋」
 - (1) 「世界史」観という問題
 - (2) 管制高地としての「新しき中世」
 - (3) 「西洋」の内なる「オリエント」へ

おわりに

はじめに

「世界の一体化」のなかで、いかに日本のこれまでの歩みを位置づけ直し、これからの歩みを「世界史」へと導き入れるのか。こうした問いかけは、いわゆる冷戦後の「グローバル(全球)化」の加速を反映するかたちで、近年の歴史研究・教育でますます存在感を高める「全球史 global history」を連想させる。論者によって定義や方法、射程はあまりに異なるとはいえ、彼らが共有する課題のひとつが、「西洋中心主義史観」の克服である。ユーラシア大陸の西端で長い時をかけて成長していく「自由」や「民主主義」、「資本主義」が海を越え、「西洋の衝撃 Western Impact」として地球を覆っていくといった、「大きな語り master narrative」を乗り越えること。

一方、この種の歴史叙述の「新しさ」への志向そのものは、近代日本の精神史に限っても、決して「新しい」ものではない。例えば、1930～40年代の日本の知識人たちの多くは、従来の「西洋近代」から発した思想や制度をいかに克服し、新たな歴史観のもと、「非西洋(アジア)」が抑圧されない秩序を、「日本」から生み出すかという問題系、すなわち「近代の超克」を共有していた。

第一次世界大戦後、「文明」の理念を担ってきたとされた「ヨーロッパ」が絶対的地位を失いはじめ、相対的に日本や合州国といった非「ヨーロッパ」世界が台頭していく現実を、日本の知識人たちは探しはじめる。1930年代、国内外の政治・経済・文化的な危機が高まると、それらは、単なる理論的思索ではなく、現実問題を解決するための実践的課題とみなされた。当時、多くの言説では、近代化のなかで西洋から導入されたとされる思想や制度(民主主義・資本主義・個人主義など)が時代遅れとして攻撃される一方、特に35年の国体明徴運動の後、立場や領域を問わず、ほとんどの知識人は、西洋とは異なる「日本」固有の歴史・文化とは、「日本精神」とは何かという問いから出発させられるようになっていた。そして、そこから新しい歴史思想の諸潮流として、いわゆる「皇国史観」が立ちあらわれていく¹。

とはいえ、「日本の特殊性」や「東洋主義」といった場の固有性にのみ立脚する歴史観では、相手の文化的前提を共有する「共同体」のなかの矛盾を扱えても、「日本」が対外的に(あるいは「帝国」として)抱えていた矛盾に対処するのは困難であった。西洋列強からのアジア解放という理念と、日本帝国による中国侵攻(あるいは朝鮮・台湾に対する植民地支配)という現実に対し、いかなる一貫した歴史的展望を与えられるのか。日中戦争初期、この課題に哲学者として取り組んだ三木清は、当時の相対主義的な歴史観を批判し、「西洋」が担ってきた近代と、「アジア」が担っていく未来を統合していく普遍的な「世界史」理念の必要性を訴え、それは国際政治においては「東亜共同体」として実現されると主張する(米原,2007,p.210ff)。さらに、イギリスや合州国との軍事的緊張が高まるなか、西田幾多郎や田邊元以下、京都学派の哲学者たちは²、「日本」という立場から、単なる日本原理主義でないやり方で、「西洋」と「東洋」という異なる場をつなぐ歴史思想のプロジェクト、「世界史の哲学」に足を踏み入れた。

彼らの知的行為は、対英米開戦で沸騰する世論と共鳴するが、「大東亜戦争」の遂行を倫理的に正当化した末に挫折する。以来、京都学派の知識人たちは、歴史の法廷にしばしば引っ張り出されてきた。戦後、丸山眞男をはじめとする論者たちは、この顛末を取り上げ、明治以降の日本知識人が「西洋」を表面的にしか学ばず、未熟な「近代」で満足したことをさまざまに批判してきた³。だが他方で20世紀末、日本やアジア諸国が高度経済成長を遂げ、また「近代化」の負の側面(戦争や公害)が可視化されると、世界中で西洋中心主義の相対化が叫ばれるようになる。その結果、「東洋」の立場から「西洋」を内在的に克服し、両者を統合する可能性を秘めた、いわば「ポストモ

¹ 近年は、こうした「日本主義」(皇国史観)と称されるものをひとまとめにするのではなく、時代を越えて安定・一貫した「國體」を前提としていた大正期までの伝統的なものと、それに対して時代ごとの危機や変革に対して国民が果たしてきた主体的な役割を強調する昭和初期からのもの(平泉澄や大川周明)とを質的に区別すべきであるという議論がある(昆野, 2013, p.366f)。

² 「京都学派」が示す範囲は研究者によって異なるが、ここでは「西田幾多郎や田邊元のもとに集まった弟子筋の哲学者グループあるいは知的ネットワーク」(大橋,2001,p.85)と定義する。

³ 丸山は論文「日本の思想」(初出 1957 年)で、近代日本の知識人の多くが「西洋」から「進歩」的思想を受け入れつつも、図式的な弁証法によって「反動的」イデオロギーに頹落していく傾向を説き、京都学派の高山岩男を名指して批判する(丸山,1961,p.25-26)。これに対して廣松渉は、戦時下の京都学派たちを批判的しつつも、彼らの議論の全体像を内在的に検討し、そこに資本主義批判の可能性を探った(廣松,1989)。

ダン」の先駆として京都学派の思想を見直す動きも生まれる。今や、「世界史の哲学」は決して排外的ナショナリズムではなく、ヨーロッパ主導の globalization に対する批判から出発し、昨今の文化多元主義に通じる論点を先取りするものであったと評価する議論も珍しくはない⁴。

だが、我々がここで深く再考すべきは、ここまで槍玉に挙げられてきた「西洋」や「近代(化)」とは何かという問題である。本来、両者は別個に検討されるべきであるのに、両者の意味や関係性を十分に踏まえないままに「西洋中心主義」を批判するあり方は今も少なくない。これを放置すれば、「非西洋(あるいは東洋)－西洋」と「前近代－近代(化)」の軸がなす粗雑な四象限にマルとバツをつけ、それらを入れ替えて、「新しい歴史観」を提示した気になる者を増やすだけだろう。近代日本について強引にまとめれば、明治期以降、知識人たちが自らの社会を批判・相対化するため、外在的に適用してきた「モデル」としての〈西洋＝近代〉とは、19世紀のイギリス、フランス、ドイツを指していたが、「大東亜戦争」を経てからは、20世紀の合州国やソ連(ロシア)を指すようになる。戦間期とはいわば、こうした〈西洋＝近代〉の意味と連関性が、前者から後者へと激しく変動し、それによって彼らの歴史理解の枠組が崩壊・変成する決定的な時期であったと言える。とすれば、1930～40年代の知識人のあいだで、「西洋」と「近代」はいかなるものとして把握され、またいかに「超克」されうると考えられていたのか。

本稿はこの問いに答えるため、「西洋」の歴史的本質に徹底してこだわり、これを「近代」と分離させることで、「西洋中心主義」を克服しようとした歴史家・鈴木成高の事例を取り上げたい。鈴木は昭和10年代、京都帝国大学で西洋史を教えるかたわら、西田たちやその弟子たちと積極的に交流し、今日も悪名高い座談会「世界史的立場と日本」にも参加したことで知られる。だが、この座談会に参加したいいわゆる「京都学派四天王」のうちで、他の三人の哲学者(高山岩男・西谷啓治・高坂正顕)に比べてある種、奇妙な位置を占めてきたからか、鈴木を思想的に検討する研究は極めて少ない⁵。哲学者からすれば歴史学者の鈴木は研究対象として扱いにくいからであろうし、歴史学者からすれば専門領域(ヨーロッパ中世史)を逸脱して発言した鈴木は倫理的に擁護できないからであろう⁶。しかし、鈴木が西洋史の知識を備えつつ、哲学者とも対話できる特異な位置を占めたという事実は、「世界史の哲学」を歴史学と哲学が交わる越境的なプロジェクトとして捉えるのであれば、決して無視できない⁷。実際、鈴木は哲学者たちへの知識の提供者にと

⁴ 再評価の流れとしては、(大橋編,2004)や(Williams, 2004)などがある一方、ポストコロニアリズムの立場から京都学派の思想を改めて批判的に検討するものも存在する(酒井・磯前編,2010)。

⁵ 欧米圏では「善」の思想への関心から、とりわけて西谷が注目を集め、主著『宗教とは何か』ははやくも1980年代に英語とドイツ語に翻訳されている。数少ない鈴木研究として(島田,2006)があるが、戦後の言説を対象としており、本稿の射程からは外れる。

⁶ 西洋史と政治思想史の立場からは、(小山,2016)と(植村,2007)が、それぞれ部分的に鈴木を歴史思想に触れているが、いずれも彼の「想像力の過剰」(史料批判の緊張感を欠いた思想戦の実践)や「前のめりの不均衡」(歴史に対する人間の能動性を過剰にみる)を否定的に位置づけるにとどまり、鈴木のもっていたポテンシャルを内在的に論じられていない。

⁷ 鈴木は「近代の超克」座談会(1942年7月開催)を前に提出した論文で、その課題を「政治においては民主シーの超克であり、経済においては資本主義の超克であり、思想においては自由主義の超克」と定めた(鈴木,1942,p.42)。しかし、哲学における「世界史」の意義を追究する京都学派と、日本文化における「近代」と「西洋」の位置づけを追究する文学者(特に日本浪漫派)のあいだには、問題意識や前提をめぐる深い溝があった。結

どまらず、彼らとの積極的な議論を厭わず、時には歴史学の立場から公然と厳しい批判や異議を唱えることも少なくなかった。

それでは、鈴木が構想していた「新しい世界史学」とはいかなるものだったのか。鈴木は、「世界の一体化」を推し進められたのが他ならぬイギリス帝国だったことに特別な注意を払っていたことは指摘されてきたが、それだけでは不十分である。後述するように、彼が「西洋中心主義」に取り組む上で問題視したのは、19世紀に西欧で根強く形成された「近代中心主義」的な歴史叙述の枠組であったからである。彼が「西洋」とともに「近代」を乗り越えるべく提起した歴史的視座、そしてそこから描いた新しい歴史像とはいかなるものであったのか。

本稿は、戦時下における鈴木 of 歴史思想の形成とその実践を検討するため、まずは鈴木が西洋中世史家として出発し、歴史思想の研究に踏み出すさまを概観し、次に「世界の一体化」をめぐる鈴木と高山の議論を、両者の対立点に注目しながら検討したのち、最後に鈴木が大戦末期に形にした歴史叙述とその意義を明らかにする。

1 鈴木成高と「ランケ・ルネサンス」

(1) 西洋史学の危機と面目

鈴木成高(すずきしげたか)は1907年に高知に生まれ、京都帝国大学文学部に入学、29年に学士号を取得して同大大学院へ進学する。同大文学部講師、第三高等学校講師、同教授を経て、42年に京都帝大文学部助教授に就任。日本の敗戦と公職追放により京大を辞したが、その後も30年以上、神奈川大学や早稲田大学で教壇に立った⁸。

鈴木は西洋中世史を専攻し、卒業論文以来、古代・中世転換期を中心に研究した。だが、彼が残した学術的な専門書は『封建社会の研究』(鈴木,1948)だけである⁹。本書は第二次世界大戦による「学問的鎖国」に突入する1939年までの現地の文献と公刊史料に依拠したものすぎない。その背景には、40代まで療養と休職を繰り返すほど病弱であったという個人の事情に加え、戦前・戦中期日本の西洋史学が抱えた構造的問題がある。ヨーロッパ史研究者であれば欧州諸国の文書館で原史料にあたって論文を書くのが本領であるはずだが、20年代末以降、世界的な

局、「知的協力会議」であったはずの座談会は着地点を見出せずに終わった。多くの先行研究が、「世界史的立場と日本」と「近代の超克」とを混同するか、全く別個に扱ってきたという菅原潤の批判は示唆的である。彼は、彼らの言説を領域横断的に検討し、そのすれ違いと隠された関係性を抽出するなかで、いわば哲学・歴史・文学の橋渡し役として鈴木に注目している(菅原,2011,p.8-10,第Ⅱ部第3章)。

鈴木と「近代の超克」座談会をめぐる論点、特に座談会で提起された「ルネサンス」を「近代」といかに関係づけるかという問題は、近代日本の歴史思想を考える上で極めて重要だが、本稿は鈴木にとっての「世界史」を扱うため、ここでは言及にとどめ、別稿を期することとする。

⁸ 鈴木 of 伝記的事実は「鈴木成高先生年譜」(鈴木,1990,巻末)にもとづく。

⁹ 戦後、鈴木 of 薫陶を受けた西洋史家・野口洋二による「あとがき」によれば、晩年の鈴木は「中世精神史」を主著としてまとめる予定だったが、死後その原稿は発見されることはなかったという(鈴木,1990, p.389-390)。

大不況のため、西洋史家の大多数にとって在外研究は夢のような話になっていく¹⁰。

さらに昭和10年代の国内外での政治情勢の変化は、日本で西洋文化を学ぶこと自体に問い直しを迫るだけの衝撃を与えた。政府や軍部の後押しによって「日本主義」的な言説が強まると、キリスト教やマルクス主義、自由主義といったものが、「日本精神」を阻害する外的要因だとして攻撃されるようになる。これに対して鈴木は日本の西洋史学が「外国学者の糟粕を嘗めても詰らないではないかといふ非難を浴びてきた」が、自分は「片々たる独創を求めるよりも卓れた糟粕を嘗めることにより多くの満足と意義とを感じてきた」と、専門家としての意志と矜持を示している（鈴木,1939,p.5）。一方で、日中開戦後、自分があまりに時局に対して無知であることに衝撃を受け、歴史家の立場から現実の課題に答えることを意識するようになったという。すなわち「ヨーロッパ的世界像が破綻を来しつつある今日においてヨーロッパの外における西洋史学は之までとは異つた新しき意義と課題とを有たねばならない」（鈴木,1939,p.5）。社会からの厳しい視線にさらされ、海外資料へのアクセスを絶たれたいま、極東の西洋史学徒のやるべき仕事は何か。それは彼らにとって実存的な問いであった¹¹。

ここで鈴木は、創始者の理念に立ち返って、近代歴史学のあり方を考え直そうとした。彼が目をつけたのは、ドイツの歴史家レオポルト・フォン・ランケ(1795-1886)である。彼は史料批判の方法論とゼミナールの制度化によって歴史学を近代科学として確立したことで知られる。このいわゆる「実証史学」は19世紀後半、世界各国の歴史研究の潮流に大きな影響を与え、¹²日本では東京帝国大学が近代歴史学を導入する際、ランケは学生たちの崇拜の対象にさえなった¹³。とはいえ、世紀転換期にはすでに、史料が公文書に、対象が政治・外交史に偏るランケ史学は時代遅れと見なされ、日本の若い歴史家たちもその著作を読まなくなっていた。

ところが昭和10年代の京都学派の哲学者のあいだでは、新たな姿勢でランケを読み直そうという動きが高まっていた。単純化して言えば、日本における一度目の「ランケ熱」が史料を厳密に検討する客観的な学問の方法に向かったのに対し、二度目の「ランケ熱」は体系的な「世界史」を成立させた近代ヨーロッパの主観的な精神のあり方に向かっていた。西田とその影響圏の人々は、ランケや彼を再評価したドイツの歴史家フリードリヒ・マイネッケ(1862-1954)の文章に取り組

¹⁰ 第一次大戦後のしばらくの間はむしろ、戦時バブルによる円高と敗戦後のマルク暴落によって多数の日本人学生がドイツに留学していた。鈴木と同じく中世ヨーロッパ(ドイツ)史を専攻していた上原専禄(1889-1975)は1923-25年にウィーン大学に学び、原文書にもとづく研究を日本の西洋史学を導入する先駆者となる(土肥,2012,第4章)。これに対して、世界恐慌を経る頃に20代を迎えた鈴木は、この留学ブームに乗り損ねたとも言えるだろう。

¹¹ 現地の文書へのアクセスが、その時代の政治・経済的な状況に大きく依存するということが、それが外国(史)研究者のテーマ選択や方法論、問題意識を決定的に左右するという。こうした問題は、IT 技術が進んだ今世紀もなお、現在の課題として存立しつづけている。

¹² 19世紀の歴史研究では人類全体の普遍的な発達法則を探究する「文明史」(ギゾーやバククル)も有力だったが、国民国家形成とともに、国家を基本単位とする「実証史学」が高等教育機関で構築されていく。欧米諸国と日本でそれが同時期に連関して進む過程については(Iggers et al., 2016)の第3章を参照。

¹³ 近代日本の歴史学でのランケ受容と「実証主義」概念の展開とその結末については、(小山,2016,p278-284)を参照。

み、「歴史哲学」の名を冠した論文や著書、翻訳を精力的に出版した(植村,2007,p.70-71)¹⁴。

鈴木自身もランケを読まない時代の学徒であったと正直に告白している。しかし、「ランケ・ルネサンス」が華ひらく場に歴史の専門家として参加したため、哲学者たちから勧められるまま、「書きたくて書いたのではなく、書かされ」る形で、1939年に単著『ランケと世界史学』を出版する(鈴木&林,1974,p.1-2)。鈴木は大学院時代、学部時代の恩師であった坂口昂(1872-1928)の遺した講義ノートを整理し、ドイツ史学史の詳細な知識に触れていたとはいえ¹⁵、中世史家にとって近代の人物を扱うのは気が引けたのだろう。ところが、蓋を開けてみると「門外漢」の手によるレビュー作は、ランケを主題とする日本初の手頃な書籍として多くの読者に親しまれたという¹⁶。

本書には鈴木が展開していく歴史思想の源泉が見出される。すでに色あせた過去の人とみられていたランケから鈴木はいかなる課題を見出していくのか。まずは『ランケと世界史』から鈴木が歴史学の水源地を掘りおこしていく軌跡をたどってみよう。

(2) ランケ史学の再解釈:歴史主義

本書は「ランケ史学を通じて現在の歴史学の直面する課題に到達」することを目標とするため、「ランケ史学の忠実な再現を意図するものではなく、私の解釈が加はる」「時にはランケを離れることさへもある」(鈴木,1939,p.1)。本書の構成は、最初の3つの章でランケの歴史思想・基本概念・論点・経歴を扱い、最終章で彼の残した問題を指摘して、これを乗り越えるための「新しい世界史学」を著者自身が示すというものである。本書はいわば、ランケ史学の入門書であるとともに、鈴木自身の歴史論でもあるといえよう。

鈴木はまず、20世紀前半の世界的な問題として「歴史主義」を挙げる。この言葉は、第一に『歴史を歴史のために』自己目的として研究する」という近代歴史学における態度、第二に「歴史に還元することによってあらゆるものを理解する」という社会一般に広まった態度であるとされる(鈴木,1939,p.18ff)。だが、この態度はいずれも認識(受動的な理解)の立場にとどまり、行為(能動的な創造)の立場へと向かわず、ただ増大する死んだ知識が人間の精神を圧迫する以上、克服されねばならない。ニーチェに代表される歴史主義への批判が、とりわけ第一次大戦後の西洋で強まりつつあるという。

この風潮に対して鈴木は、批判の渦中にある歴史主義をいったん、19世紀ヨーロッパの歴史的な文脈に位置づけ、それが本来もっていた可能性を確認する。歴史主義とは、本来必ずしも「過去

¹⁴ 京大西洋史学研究室でも「歴史哲学」ブームが見られたようだ。同窓組織の「西洋史読書会」(現在も存在)では当時、歴史と哲学の分野横断的な交流が盛んになり、例えば、当時は文学部講師で、後に「四天王」のひとりとなる高坂正顕を招いて「歴史的主体」(1934年12月例会)という報告が行われたという(京都大学西洋史研究室編,1982,p.19-21)。

¹⁵ 後に『独逸史学史』として出版される坂口の遺稿整理は京大助教授であった原随園(専門は西洋古代史)の監督下で進められ、鈴木は第四篇を担当した(坂口,1932,序文および凡例)。

¹⁶ 例えば、ロシア史家の鳥山成人(1921-2005)は、戦時下の東京帝大文学部に入学する前、東西両方の国史が「極右の神国史観」に支配される実情を知り、西洋史学を選んだが、その理由のひとつとして「当時よくよまれた京都学派の鈴木成高氏の『ランケと世界史学』などの影響もあった」と回想している(鳥山,1964,p.47)。

を再現せんとする要求や、現在をば過去に還元することによって理解する態度ではない。それは合理主義と目的論が圧倒的であったヨーロッパの知性において、法則化・抽象化できず、概念・理論・分類で明確に割り切れず、歴史上で一回限り生起した出来事を把握するのに不可欠な原理だった(鈴木,1939,p.21ff)。これによってはじめて、社会批判や道徳の手段に過ぎなかった歴史的事実は、いまや科学的な探求対象となり、歴史学は哲学や自然科学に対して自律性を主張できる。歴史主義とはそもそも、かけがえのない個物が形成する有機的世界を生き生きと描く行為を根本から支える精神だったのである。

ランケはなぜ歴史主義に火をつけられたか。鈴木によれば、歴史はそれぞれが神に直結し、それゆえに自らは歴史に奉仕するというランケの信仰的態度が、彼を精力的な探求へと導いた。だが同時に、宗教はランケの歴史探求の動機ではあっても目的ではないという指摘を見落としてはならない。歴史それ自体を直接の目的とする強固な信仰は、歴史を宗教に従属させる神学的・目的論的な態度ではなく、むしろ歴史的事実の認識に専念する学問的な態度を作ったのである。こうして歴史学は宗教的要素から解放されると同時に自らの限界を定め、客観的な学問となる。そこで最も重要なのは「個別的事実がそれぞれ神にかかはるものであると同時に、事実と事実とを結ぶイデア的關係が正に神的なるものとして把握せられる」(鈴木,1939,p.16)¹⁷という点である。

だが、その後の歴史学は個別事実の探求に注力するあまり、全体の把握を軽視する道に陥る。19世紀後葉から文献批判がより厳密になり、史料ジャンルおよび研究領域も拡大することで、歴史学の客観性は著しく高まるかに見えた。だが、歴史記述の客観性とは一定の読者がその妥当性を認めるかどうかで決まる、主観的かつ相対的な性格をもつ以上、方法論的な客観性を盲信することは危険である。むしろ学の専門分化のなかで歴史家たちが「全体性」を見失うことで、歴史そのものを問う世間一般の要求に応えられなくなったと鈴木は説く。

歴史主義の危機を乗り越えるため、ランケから学ぶべきは、その方法論ではなく「全体」を把握するあり方である¹⁸。鈴木は全編にわたり、そう主張する。原因と結果の因果関係から事実関係

¹⁷ この点を無視して「鈴木にとって近代の超克とは宗教への回帰にほかならない」とする中島岳志の議論は、核心的問題に触れつつも、致命的な破綻に陥っている(中島,2013,p.187)。①鈴木はここで、ランケの歴史観はその強烈な宗教性に支えられつつも、その学問は宗教から切断されていた点を強調しているのに、中島は前者のみを恣意的に引用し、神のもとで有機的・統一的な世界が成立していたという鈴木の中世ヨーロッパ像に強引に結びつけ、自身と鈴木の考えを混同させるような書き方をしている(中島,2013,p.183)。②鈴木 of 思想を中世と近代の単純な対立図式(宗教に基づいた有機的な世界 vs 神を失い人間性が解体された世界)に帰する議論は端的に誤りである(中島,2013,p.183)。実際には、鈴木は近代に形成された時代区分(古代・中世・近代)を批判し、その外からヨーロッパ的世界史を捉え直そうとしたからである(本稿の三(2)を参照)。③中島が鈴木思想に読み取る「宗教に基礎づけられたアジア的価値を確立し、次に世界を普遍的構造で包み込まなければならない」というテーゼも、全くの無根拠・無論理である(中島,2013,p.186)。鈴木自身は、そうした「アジア的価値」なるものを(キリスト教的伝統・紐帯が存在しない)日本や東アジアで構築することの困難さを強調している(本稿の二(3)を参照)。

¹⁸ このような後期西田哲学の国家論とも親和性の高い読解は「哲学化されるランケ」として否定的に捉えられることがあるが(小山,2016,p.284ff)、そうだとすれば合州国の歴史家たちが日本とほぼ同じく1880年代からドイツを模範に「アカデミア史学」を形成していく際、ランケの理念的な部分を捨象し、方法論(史料批判)のみを導入したやり方も「世俗化されるランケ」として同様に批判的に検討すべきだろう。ここで、西欧の人文・社会科学における「実証主義」懐疑の潮流(ヒューズ,1970)が第一次大戦後、合州国の歴史学にも流入し、社会科学の勃興を

を合理的に説明する哲学に対し、非合理の世界を扱う歴史学は全体が特殊(部分)に対してもつ関係において過去の出来事を叙述する。したがって、個々の歴史的事実を精確・網羅的に集積しても、それらを貫く全体を欠けば歴史叙述としては不十分である。では「全体」とは何か。ランケ曰く、それは「方法的合理性によつて実証されるものでなく直観によつて直接把握せられる」ものである(鈴木,1939,p.32)。なればこそ、歴史家ランケの本質は、事実を分析するための科学的手続き(史料批判)ではなく、歴史全体の把握を可能にする「精神の偉大さ」に宿っている。

以上、鈴木によるランケ解釈を概観したが、歴史主義への危機感といい、歴史学の専門分化と「全体性」喪失のジレンマといい、ここまでの議論や問題提起それ自体は、戦間期の言説としては珍しくはない。鈴木もまた同時代の多くの知識人と同じ問題を共有していたに過ぎない。ここで検討すべきは、ランケとの格闘を通じて、ヨーロッパ史の専門家として発見した鈴木なりの課題とは何であったかということである。

(3) ランケ史学への批判:ふたつの課題

鈴木の見立てでは、ランケのすべての歴史叙述は「世界史」的である。たしかに彼の著作のうち「世界史」の名を冠するものは一部で、その多くは「イギリス史」や「フランス史」のように、特定の国家を扱うものであった。だが、ランケの叙述は、決して国民史を網羅的に寄せ集めた言説(量)ではなく、諸民族の相互関係のなかに個別対象を直観的に見出すことで全体・統一性をもたせる物語(質)である。全体・統一的な歴史的世界のなかで過去の事象を認識する立場こそが「世界史的立場」であり、それらを実践・叙述するあり方が「世界史学」である。歴史を総体的に把握する知的態度として「世界史」を問いつづけ、これを刷新していくこと。それこそが鈴木が手にした根源的な課題であった。

一方、ランケをはじめ19世紀の西洋で書かれた「世界史」がほぼ全て、中世以降のヨーロッパ地域しか扱っていないという批判は当時からすでに存在していた。そうした事情を踏まえつつも、「西洋」で発生した理念を内在的に問う鈴木は、ランケ的な「世界史」の時空間的な欠如を外から指摘する批判はせず、まずは彼が活躍した19世紀には「世界史」が「ヨーロッパ史」にほかならなかった理由を検討する。ランケが有機的な全体として描くことのできた「世界」とは「ヨーロッパ諸民族」が織りなす栄枯盛衰の場である。歴史の主体と彼らを結ぶ精神的紐帯の起源は、(西)ローマ帝国末期に欧州各地で台頭する「ローマ風ゲルマン風共同体」とキリスト教である以上、ランケが「西洋」以外の地域を、また先史と古代の「ギリシャ風ローマ風共同体」を「世界史」の対象から除外したのは、統一的叙述のうえでも学問的方法のうえでも正当なのである。

無論、20世紀の「現在においてヨーロッパは最早や世界ではない」(鈴木,1939,p.139)。これ

背景に、それまで前提とされた「客観性 objectivity」をさまざまに捉え直されていたことに注意したい(Novick, 1988, Part II)。我々が問うべきは、ランケを「哲学化」した日本近代の特殊性だけでなく、それを可能にした世界史(あるいは共時的)的な条件である。

から日本人が新しい世界像をつくるため、いかに距離をとってヨーロッパを捉えるべきか。ここで浮かびあがる課題は第一に、「西洋中心主義」的な歴史観を支えてきた客観的条件、「ヨーロッパ」が「世界」と同一になっていく「世界の一体化」の実体論的な過程を問うことである。一方、ランケは、歴史的对象だけでなく、その観察者もまた歴史的世界のなかで動かざるをえないことを心得ているという。例えば、彼が歴史で重視する「傾向Tendenz」は、人間と歴史のあいだの必然と自由の対立から生じ、各時代をそれぞれ一定の方向に規定するが、ひとつの概念にまで要約することのできないものである(鈴木,1939,p.48ff)。つまり、人間は歴史的世界に対して受動的かつ能動的に関わるとすれば、第二に問うべきは、「西洋中心主義」的な歴史観を支えてきた主観的条件、「世界史」が「ヨーロッパ」のなかでさまざまに認識され、変化していく過程である。鈴木はこのふたつの問題を、京都学派の哲学者たちとの議論でいかに深めていったのか。

2 「世界の一体化」をめぐる論争

(1) 高山岩男と「世界史の理念」

「世界史の哲学」を主導したのは哲学者・高山岩男(1905～93)である。彼は西田や田邊元のもとで哲学を学び、ヘーゲル研究から出発するが、やがて学統の継承者として師の期待を受け、京大文学部哲学科講師に(後には同助教授に)就任する。30年代にはドイツの文化哲学や生の哲学を吸収し、社会一般の課題にも取り組んだ。戦後の公職追放後も研究を続け、国際政治から教育論まで多くの分野で膨大な著作を残した¹⁹。

戦時期の高山は時局を意識した発言を、「四天王」のなかで最も積極的に行っており、帝国海軍との秘密勉強会でも学者側のリーダーを務めた²⁰。だが彼が具体化していく「世界史の哲学」は当初、歴史家の鈴木から厳しい批判を受け、高山がこれに真摯に応答し、互いの歴史思想が変化・深化していったことは忘れられている。哲学者と歴史家は何をめぐって対決したのか。

高山は「西洋」を相対化できる新たな「世界史」を構築しようと努めていた。その最初の歴史哲学的なスケッチである「世界史の理念」(1940年初出)ではまず、19世紀末までのヨーロッパ世界の政治・経済・軍事・文化的な諸力が全地球を飲み込んだことを踏まえ、「我々は逆に、それ以前に地球上には随所に、ヨーロッパ世界と並存する多くの歴史的世界が存したことを、認めなければならぬ」と主張し、そのうえで歴史思想の鍵概念として「特殊的世界史」と「普遍的世界史」を

¹⁹ 本稿での高山の伝記的記述は、(花澤,1999)にもとづく。

²⁰ この「秘密勉強会」は、海軍調査課の高木惣吉による「ブレーン・トラスト」として、京都学派の人々と1942年2月から45年7月まで極秘に開催された。田邊の弟子であり、書記役を務めた哲学者・大島康正(1917-89)が残っていた覚書が2000年に発見され、大橋良介による詳細な解説とともに出版された。京都学派の「戦争協力」の背後には、戦争継続を唱える陸軍主流派と、終結工作を進める海軍の一部(米内光政派)の対立が存在した。警察権力をもつ陸軍と、言論を圧倒する右翼勢力に対抗して行われた彼らの活動は、「反体制的な戦争協力」として常に潜在的な暴力に晒されていたことは念頭に置いておく必要がある(大橋 2000, p.20ff.)。

提示する。

世界は民族と民族、文化と文化との連関を俟って成立する。世界も歴史的に成立するものである(中略)従って、我々は二つの世界史を一応区別しなければならぬ。一は民族と民族との連関より構成せられる世界の世界史である。我々はこれを特殊的世界史と称することができる。もう一つは特殊な世界と世界を構成員とする世界の世界史である。我々はこれを普遍的世界史と称することができるであろう。この二つの世界史は共に世界史として同様の構造を有し、また離れ離れのものでなく密接に連関している。併し両者は決して一つではない。従来の世界史は特殊的世界史であった。普遍的世界史は【引用者注:中略】ヨーロッパ世界の拡張史を媒介として、現在成立しつつあるのである。(高山,2001,p.71-72)

18世紀までは東アジア世界、イスラム世界、中央アジア、アフリカといった各地域・文化圏では、それぞれほぼ閉じた独自のシステムのなかで歴史が営まれていた。だが、19世紀以降、移動・通信手段の発展とともにヨーロッパ世界がその他の「特殊的世界」に強い影響・支配力を行使するにつれて、複数の「世界の一体化」(普遍的世界)の歴史へと転換していく。とすれば、人類史の長い射程からすれば、複数の「世界史」が別個に存在するのが常態であったわけで、「近代」が本格化する以前はヨーロッパ的「世界史」もそれらのひとつに過ぎない。

高山はこうした前提から出発し、ヨーロッパも含めて「特殊的世界」が自律性を失う前に存在した文化や価値に注目し、それぞれの特徴を明らかにすることで、「近代の超克」に相応しい世界史像を目指した。各地域・文化圏がもった価値の独自性とその多元性を擁護する高山の歴史観は、一見すると、文化相対主義の立場からは受け入れられやすいし、戦後日本の中等教育「世界史」の説明にも適合しやすい構図である²¹。

(2) 歴史家と哲学者の対決

けれども、「特殊的世界史」から「普遍的世界史」への変動を担ったのは、他ならぬヨーロッパ世界であったという点はどう説明するのか。単なる歴史的偶然にすぎないのか。この欠陥に切り込んだのが、鈴木論文「現代の転換性と世界史の問題」(1940年初出)である。

鈴木は20世紀前半は「近代的世界」(近代ヨーロッパ世界の地球的拡大)から「現代的世界」(非ヨーロッパ世界の自律化)への転換点にあり、もはやヨーロッパを中心とする「世界史」は説得

²¹ 戦後日本の「世界史」教育にとって重要な位置を占めるという(羽田, 2011, p.49)上原専祿『日本国民の世界史』による構図と比較できる。「東アジア世界、インド世界、イスラム世界、ヨーロッパ世界の四つの世界が、それぞれ固有の文化と生活様式をつくり出し、それぞれ独自の歴史を展開させ」、それらは別個の世界であったものが「地理上の発見によって準備され、資本主義の発展によって動機づけられたところの、ヨーロッパによる諸世界の統括と支配という形の下に一体化された世界の形成」によって「一体化の密度をたかめてゆく「世界史」において生きはじめた」(上原, 1960, p.59-60)。

力をもたないという高山の見解にまずは同意する。他方で「従来のヨーロッパ的世界史がその故に真の意味の世界史でなかつたとは私には到底考へられない」と口火を切り、以下のように自身の立場を対置させている。

文化類型学の立場においては特に、文化の多元性の認識はおそらくその根本的な課題でなければならないであろう。然し歴史学にとつても同様にそれが極めて重要な課題の一つであることは疑なきところである。然し世界史学の立場に立たんとする限りにおいては、仮令素樸なりと雖も私は尚ほ必ずしも世界史一元論の見解を簡単に脱することができないのである。(鈴木,1941,p.208)

引用にある「文化類型学」とは、高山が自らの文化哲学の方法論として当時、すでに同名の著書のなかで提唱していた方法論である。彼はまず、同じ風土的環境で長期の共同生活のなかで育まれたものを「民族精神」、それが特定の形式をとって具現化したものを「文化」とする。これらは人間の形成物である以上、各文化を理解するには、その歴史的発展と精神的本質をともに観察せねばならない。歴史学は前者、つまり「民族文化」の変化過程を叙述するのに対し、「文化の底に流れて不易な民族精神の本質」を把握するのが文化類型学の目的であるという(高山,1939,p.5-6)。ここに同時代に台頭していた「風土論」(和辻哲郎)や「比較文明論」(アーノルド・ジョゼフ・トインビーやシュペングラー)の影響を観ることもできよう。しかし本論で重要なのは、高山がギリシャ・インド・キリスト教・仏教・中国(支那)・西洋・日本の「文化類型」を抽出・比較し、それぞれ自律したものととして並列的に論じている点である。一定の歴史性を越えて各空間に宿る文化の構造こそが、多元的世界史を支える根拠となるからである。

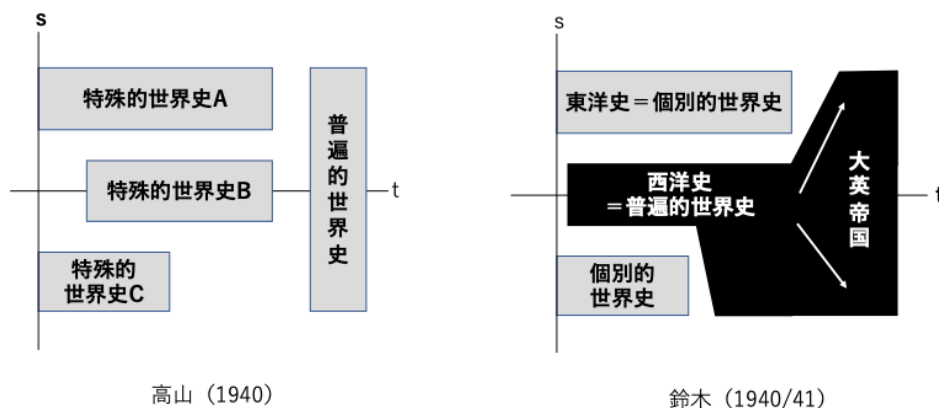
だが、歴史学者の鈴木にとっては「世界史」とは必ず「一つの歴史」である。国家であれ民族であれ、互いに自律する個別的なもの同士がひとつの「世界」を作るには、それらが空間的に並存するだけでなく、より高次の普遍的関係がそれらの媒介物として存在せねばならない。それにもかかわらず、高山は前近代からの「特殊的世界史」の多元性を強調する反面、それらが単一の「普遍的世界史」へと移行する過程を説明できていないと鈴木は批判し、こう反論する。

過去においては世界の多元性は空間的にのみ存在してゐて同一なる歴史的時間によつて媒介的に統一されておらなかつた。かかるが故に各地域は互に並列的に遊離して世界史をなさなかつたのである。然るに今日においてはこの空間的多元的な世界が時間的世界となつたことによつて、そこに統一的な「世界史的世界」が見られるのではないか。(鈴木,1941,p.216-217)

この時点では、「世界の一体化」の性格をめぐる、各文化圏の構造的多元性(空間＝静態的側面)を強調するか、ヨーロッパ世界による諸「世界」の統合過程(時間＝動態的側面)を強調す

るかという話でしかない。しかし、鈴木は続けて、高山は「特殊的世界史」同士の違いを無視している、それぞれの「世界史」の思想を生んだ磁場の特殊性を吟味すべきだと論じる。すなわち、ヨーロッパは長い歴史のなかで、自らの「世界」内(やがては地球上の諸「世界」の)諸民族を統合できる高次の内的連関性を育んだ反面、それと同質の普遍性は「東洋」(インド・中国・日本)には生まれなかった。それゆえ、19世紀までの段階ではヨーロッパ世界のみが「普遍性」をもっていた。だが「世界の一体化」を経て「世界史的時間」、すなわち「西洋」世界の影響を受け、各世界がすべて互いに連関する場で生きているという時間感覚を、地球上のより多くの人々が経験するようになったいまでは、もはやヨーロッパに限定された「世界史」は成立しようがない。

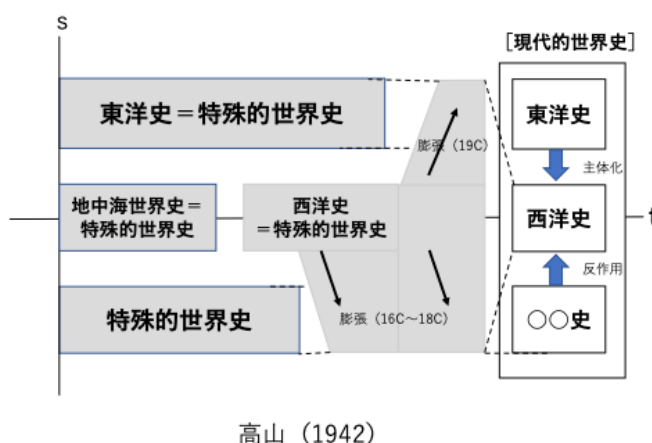
それでは「世界の一体化」に至る歴史叙述はどのようなものか。高山が、複数の孤立した「特殊的世界史」の並存(前近代)から単一の「普遍的世界史」への収斂(近代)への二段階の図式を示すのに対し、鈴木は次の四段階図式を示す。(一)地中海的世界(古代ギリシャ・ローマ)→(二)ヨーロッパ世界の形成(中世)→(三)ヨーロッパ世界の膨張(近代)→(四)世界史的世界・非西洋世界の自律化(現代)(鈴木,1941,p.218-219)。両者の「世界史」像を図にすれば以下のような(s軸は空間、t軸は時間をそれぞれ示す)。



鈴木からの批判を受けとめた高山は、あくまで「西洋」世界の相対化にこだわりつつも、論文「世界史の系譜と現代世界史」(1942年初出)では、特に(三)から(四)の流れに注目して、世界史の構図を修正している。つまりヨーロッパ世界の膨張は、(ア)一九世紀初頭までの拡大(ヨーロッパ大陸からアメリカ大陸へ)と(イ)それ以降の拡大(欧・米からアジアへ)のふたつに分けられ、次に(ウ)世紀転換期からヨーロッパ世界の外部への依存の高まりによって東アジアが自立化し、最後に(エ)一九二〇年代に制度上ではヨーロッパ覇権が失陥する。以下に示す図の通り、こうして高山は「特殊的世界史」から「普遍的世界史」への接続を鈴木の構図を取り入れることで、説明しようとした(高山,2001,p.389)。

高山の2つの図式を比べると、鈴木の影響で大きく修正されたもの(1942)は、最初のもの(19

40)に比べて、やや複雑な印象を与えているものの、各「世界」(史)が互いに並列する前近代から、それらが「西洋」世界(史)を軸に関係する近代への流れを動的に示している。「西洋」世界の膨張、その他の世界への作用、そして「西洋」に組み込まれた地域からの反作用(受容・反発・変異)を通じて「世界の一体化」が進むという「語り」は、なぜ19世紀まで



は「西洋」の「客体」に置かれていた非「西洋」の民族が、歴史的発展の「主体」へと転じることができると説明している。

鈴木が高山に与えた影響について、菅原潤は文化多元主義から西洋中心主義への後退をもたらしたとして否定的に評価するがそれは一面的である(菅原,2011,p.101-114)。確かに、修正後の高山の構図が、彼が研究したヘーゲルの弁証法に陥っているのは否定しがたい。だが、両者の議論は、特殊的世界史から普遍的世界史への移行に的を絞ることで、超克すべき「近代」を19世紀的な「西洋」世界に見出すことができている。鈴木の中核は確信犯的な「西洋中心主義」は、決して非「西洋」世界の歴史を軽視するものでも、「世界の一体化」を道徳的に是認するものでもない。そうではなく、ヨーロッパ的「世界史」の固有性とその限界を、あるいは「西洋」と「近代」のつながりを批判的に見定め、20世紀以降の未来に向けて「日本」という場から「新しい世界史学」を作っていくための実践的な展望を示すという意図をもっていたのだ。

(3) 対決のゆくえ

画一的な近代文明へと向かう目的論的な歴史観(文明史からマルクス主義まで)がまだ強かった20世紀前半、鈴木と高山の論争は「世界の一体化」の歴史を叙述しようとする先駆的な試みといえる。同時に、京都学派の議論が昭和10年代の厳しい国際情勢を背景としていたことを踏まえておこう。無論、それは彼らの「政治責任」を問うことと深く関わるが、本稿は彼らの倫理的な瑕疵を非難するものでも、彼らの学問を政治から切断して擁護するものでもない。我々が問うのは、彼らが「世界史」の理念を、世界戦争という状況下で、いかなるかたちで掘り下げたかである。

京都学派四天王が集った座談会「世界史的立場と日本」(全3回)は「大東亜戦争」開戦前後の気分の高まりに便乗し、馴れ合いに満ち、思慮と緊張感に欠けた漫談として否定的な評価を受けてきた²²。だが一方、対談記録という媒体は、参加者同士の位置関係や対立点を探るうえでは、

²² 雑誌『中央公論』に掲載された座談記録は一冊にまとめられて出版された(高坂ほか,1942)。開戦前後の時代の雰囲気伝える一級の資料であるにもかかわらず、現在に至るまで再版されていない。一方、英語圏では詳

独白形式の論文や著書よりも有益である。以下、鈴木と高山の「世界史」をめぐる座談会での言説をふたつの論点にしたがって検討してみよう。

第一の論点は「大東亜戦争」の理念的な敵である。この戦争が「太平洋戦争」、「アジア・太平洋戦争」、「十五年戦争」、「日米戦争」と多くの呼称をもつことは、日本の主敵が歴史認識の面では定まりにくいことを示している。「大東亜戦争」は当初、「西洋」から「アジア」の同胞を解放する「日本」の戦いであったはずだが、実際には日本はドイツやイタリアと同盟し、何よりも中華民国(重慶政府)と戦争状態にあった。開戦当時、日本の多くの知識人と同じく、鈴木や高山たちは、この理念と実態の矛盾を見過ごしていない(高坂ほか,1942,p.166f)。彼らは日本の戦争目的を長期の歴史的視点からどのように説明するのか。

鈴木はすでに開戦前に日本の理念的な主敵はイギリス帝国であると答えている。当時、中国利権をめぐる日本の世論では対英排撃論が盛り上がっていたという背景もあるが、鈴木がイギリス帝国に注目するのは、それがヨーロッパ的世界を全地球的な存在へと押し上げた唯一の存在だからである。彼は「世界史と大英帝国」(1940/41年初出)において²³、イギリスがもとはヨーロッパ世界の周辺国であったが、その地理的条件を利用して「世界」外に貿易活動と植民地を求めていき、「世界の一体化」を担っていく過程を叙述している。特にアメリカ独立戦争で北米植民地の多くを失った後、直接・間接的統治を駆使することでアジア・アフリカに広大な植民地帝国を打ち立てたのが19世紀である。ここで超克すべき「近代」とは19世紀的な「西洋」である以上、日本の主敵がイギリスであるのは明白である²⁴。

ここで注意すべきは、第一次大戦後の「大英帝国」没落論、また大陸利権での競合に端を発する激しい排英論に反し、鈴木はこの帝国の理念を見くびっていないことだ。イギリスは単なる国民国家ではなく、長い伝統のなかで「コモンウェルス British Commonwealth」と呼ばれる独特の理念をもつ。それはブリテン島から各植民地・自治領・租借地、そして英連邦加盟国に至るまで、王冠のもとに様々な要素・ネットワークが強固かつ複雑に絡み合って成立する政治体であり、そこに同質的な国民国家とは異なる特質と強靱さを認めている²⁵。このように鈴木はヨーロッパ的な「世界史」の内在的展開のうえに日本の戦争目的を具体的に位置づけ、分析しようとした。

第二の論点はイギリスに対して日本はいかに戦うべきかである。座談会では、この戦争は単なる国力・武力の争いではなく、理念における闘いでもあることが強調され、鈴木も「英米が東亜を

細な解説と注釈を施したうえで、座談記録が丸ごと翻訳されているのは注目に値しよう(Williams,2014)。

²³ これは『歴史的国家の理念』第一部をなすが、「昨年の秋三高英語部のために連続講義し、また今夏京大文化部のために講演したものを一応書き改めたものである」という(鈴木,1941,p.5)

²⁴ 「西洋」を地球大に拡大させた最大の推進力としてイギリス帝国を位置づけるやり方は、前節で図示した鈴木(1940/41)と高山(1942)の「世界史」の展望に反映されている。

²⁵ 「コモンウェルス」の歴史的・思想的な概説は(小川,2012)と(岩井,2014)など。鈴木によれば、「現段階における大英帝国は、在来の国家概念によつては規定することのできないような、きわめて特殊な構造体をなしてある」「それは国家といふよりもむしろ一個の超国家であり、アングロ・サクソン世界秩序である」(鈴木,1941,p.19)。それは政治上の「欧州外的遠心性」(王冠への忠誠にもとづくフラットで脱中心的な構造)で第一次大戦を制し、経済上の遠心性(本国・植民地・合州国を結ぶ海上貿易)によって世界第2位の地位にあるという(鈴木,1941,p.36-49)。

搾取したといふのは事実であるが、しかしただその復讐のために戦争をやるといふやうな小さなことではない」と述べる(高坂ほか,1942,p.307)。だが、日本がこれからの「世界史的使命」を担う前衛的な主体になるとすれば、それを可能にする根拠は何か。ヨーロッパは近代までに自らの「世界」外に膨張したという根拠をもつものに対して日本はどうか。これは、なぜアジアで日本だけが近代を達成できたかという、戦後も様々な文脈で繰り返されてきた問いでもあり、今や「日本特殊論」として一蹴されよう。だが戦時の文脈では、東アジアの諸民族のなかで日本だけが指導的立場を取るのを正当化する戦略的な必要性が、この問いの背後にあった。

以上の論点は十分に掘り下げられなかったものの、時として緊張感を欠き、マジックワードの勢いで進む座談会において、鈴木は時にある種のストッパーとして独自の存在感を発揮することがある²⁶。鈴木は「支那のやうに受動的に強制されて、しかも自ら近代化し得ずして受動的な半植民地的隷属に止まったのではなくて【引用者注:中略】日本が能動的にまた主体的に近代化し、さういふ段階を経てきたといふことに却つて日本の主体性を見出し得る」と述べ、それは古代から続く日本独自の「弾力性」に基づくと高山も同意する(高坂ほか,1942,p.388-389)。一方、別の箇所では、「世界の多元性を深めることでその一つである日本の主体性の理論的根拠を掴める事には同意するが、なぜ他ではなく日本が指導性をもつのかは類型学的な発想では出てこない」と高山を批判する(高坂ほか,1942, p.382)。これは実践的には、19世紀までに「世界の一体化」の歴史を指導してきたイギリス帝国および「コモンウェルス British Commonwealth」に対抗できるような倫理性とその歴史的根拠を、20世紀の「世界史」を指導していく日本および「大東亜共栄圏」がもちえるのかという問いかけであった。多元的世界史論者の高山は、責任主体(自由と平等)に立つ「西洋倫理」に対して、伝統的な家族の論理に立つ「東洋倫理」を「共栄圏」の土台として提案しているが、これに対して鈴木は「支那なんかには非常に古い家の倫理といふものがあるでせうし、さういふ風に共栄圏の中には古くから倫理観念をもつた民族があるわけだから、一定の倫理観念を我々が持出すといつても倫理観念の闘争が起るのではないかと思ふ」として首肯しない(高坂ほか,1942,p.249)。

もっとも、鈴木思想にも大きな限界を認めざるをえない。それはまず、歴史的世界における「特殊」と「普遍」を、明確なかたちで概念づけていないことである。無論、それは歴史哲学に立ち入らず、あくまで具体的な事例に即して思考する歴史家としての態度表明であろう。だが、歴史的世界を所与の基準やモデルに基づいて分析するのではなく、対象の動きを自己との関係から直感的に描写する鈴木議論は、一方では高山のような体系的な拡がりをもつことができず、他

²⁶ ある民族が歴史を進める原動力としてランゲが用いたという「モラリッシュ・エネルギー」は、座談会のマジックワードとして機能し、四天王たちの運命に暗い影を落とした。例えば、中国民族に「道義的生命力 moralische Energie」の欠落を指摘する高山の議論は海を渡り、同じ「共栄圏」内部から、「南京国民政府」(汪精衛政権)の知識人から厳しい怒りと批判の声を招くことになる(関,2019,第9章)。まさしく鈴木が懸念していた「東洋」世界内での「倫理観念の闘争」が生じたのだ。

方では一定の手続きによる検証可能性を欠いてしまったことは否めない²⁷。

こうして鈴木と高山が作った「世界史」の理念は、「大東亜戦争」を理念的に肯定する試みとしては敗北した。海軍との秘密勉強会の覚書に、「コモンウェルス」を意識して「共栄圏」の理念を充実させようとする苦心の跡が残るだけだ²⁸。「世界史の哲学」が戦場の実態を経ない観念的なものの、以上の議論から分かる通り、両者はそれぞれのやり方でヨーロッパ的な「世界史」の強靭さと真摯に向き合った。だが、「世界の一体化」をめぐる争点とは別に、「西洋中心主義」との対峙にとって重要なもうひとつの争点があった。「ヨーロッパ的世界」がいかに構築されてきたかである。

3 方法としての「西洋」

(1) 「世界史」観という問題

近代以降の「普遍的世界史」を牽引したヨーロッパ世界の固有性を強調する鈴木に対し、高山は「世界史の種々の理念」(1941年初出)で次のように反論する。すなわち「世界の一体化」を成し遂げたのはヨーロッパ世界だが、それはあくまで近代が進んでからである。前近代までのヨーロッパはやはり「特殊的世界史」に過ぎず、鈴木のように「普遍的世界史」の根拠をヨーロッパの中世・古代に連続的に求めることはできない。むしろ、私たちのもつ「西洋中心主義」的な「世界史」観がヨーロッパ史のなかでいかに構築されたか、すなわち「世界史の系譜」を問うべきだとする(高山,1941,p.57-58)。ここで、鈴木が「近代=ヨーロッパ」の地球的拡大が不可逆であったことを歴史的連続性から説こうとするのに対し、高山はそうしたヨーロッパ的な「世界史」の構築性に注目してその断絶性を暴こうとしている。いわば高山は「世界史の哲学」の実体論からその認識論へ争点を移行させたのである。

鈴木もまたヨーロッパの歴史観の批判的検討を重視していた。「近代の超克」とは、近代的歴史観の前提である進歩史観の克服に他ならないからだ。彼は『ランケと世界史学』で、ヨーロッパにおける「世界史」観を取り上げていたが、それをより掘り下げた論文が「世界史観の歴史」(1944年初出)である。まず「世界史」の認識を規定するのはその対象ではなく構想であり、すべての「世

²⁷ これは反面、鈴木が、概念化(哲学)からも実証主義(歴史学)からも距離を取って、歴史(学)を表現行為として実践した孤独な人文学者であったということでもある。当時、京大生だった岩井忠熊は、その独特の語りで人気を博したという西洋史講義の思い出を語り、京大では鈴木のみが「日本精神とか、そういうことを一言も口にしていない」と評価し、そんな彼が「大東亜戦争」を思想的に正当化するような哲学者たちと連携したことを長く、不思議に感じていたと回想する(京都大学文書館編, 2006, p.358)。

²⁸ 海軍秘密勉強会の第3回会合(1942年、日時不明)では「東亜共栄圏 commonwealth, dominion なる考の基礎の検討」と題して、理念・法制度・経済・組織といった点から「大東亜共栄圏」をいかに「コモンウェルス」と差別化すべきかを検討している(大橋, 2001, p.194ff)。そもそも「共栄圏」という名称それ自体が、物質的繁栄を主とした「アングロサクソンの民主ラシーの世界観に通ずる」という意見はすでに交わされていたが(大橋, 2001, p.176)、何の積極的な代案を出せないままにこの「戦争協力」が時間切れを迎えたことは、「大東亜戦争」を「日米戦争」でも「日中戦争」でもなく「日英戦争」として、つまり「帝国主義」を延命させようとする帝国と、それを自ら抱えて破壊(自殺)しようとする帝国の戦いとして捉えるとき、重要な示唆を与えるだろう。

世界史学は「全体を求める心」にあると前提し、時代ごとにヨーロッパの歴史観を説明する。古代の「循環的世界史観」から始まり、中世の「キリスト教的歴史観」(救済史観)で歴史は神のものとして一回性と不可逆性を帯び、中世からの過渡期の「網羅的世界史観」(諸国民史の集成)で歴史叙述の対象が拡がり、近代の「目的論的世界史観」(啓蒙主義)で歴史は人間(理性)の手に戻り、その進歩的理念は視野を「人類」全体へと拡げる。これに対して進歩や因果法則に抵抗するランケの「関連的世界史観」は直観を通じて個別的な存在を描いた(鈴木,2000,第1部第2章)。

ここで争点になるのが、ヨーロッパ史において古代をどう扱うかである。伝統的な歴史叙述は、古代ギリシャ・ローマ、あるいは「古典古代 classic」をヨーロッパの政治・文化的起源とみなし、4世紀前後に若干の断絶を認めつつも、中世以降に接続させることが多い。これに対して19世紀末、ドイツの歴史家エドゥアルト・マイヤー(1855-1930)は、ギリシャ・ローマ人を地中海地域の諸民族との関係のなかで位置づけ、これを「地中海世界」としてヨーロッパ世界とは別個に扱うべきとした。またローマ帝国では近代と同じくらいの高度な資本主義システムが発達していたが、「地中海世界」と共に滅びたというテーゼは、経済史家カール・ビューヒャー(1847-1930)と有名な論争を引き起こした(牧野,2003,第4・6章)。

高山はマイヤー説を援用して「特殊的世界」としての「ヨーロッパ」を古代と近代から切断して、中世のみにとどめて相対化しようとする。鈴木はマイヤー(と高山)の歴史観を「並行主義的世界史観」という枠組に置き、それはあるパターンとサイクルを備えた歴史が古代・中世・近代に反復・完結するという発想に基づくとする。こうした史観はそれぞれバラバラな「世界史」を典型的に比較するものとして、鈴木はこれに賛成せず、歴史理解の手段・方法以上の価値を与えない。歴史叙述の目的としては、古代から近代までの一貫性を重視するランケのような「連続主義的世界史観」を、ひとつの「世界史」の立場を選ぶ(鈴木,2000,p.141-142)。だが、なぜ鈴木はこれほどまでに歴史認識の一貫性にこだわるのか。そしていかに近代的歴史観と対峙したのだろうか。

(2) 管制高地としての「新しき中世」

鈴木は「中世」の高みから近代の歴史観の歪みを眺めていた。今日もなお根強い影響を残す西欧から発した歴史叙述の三分法は、栄光の時代(古代)、それが失われた時代(中世)、はるか古の栄光を取り戻す時代(近代)というように、中世への否定的評価を内包した語りの構造を免れえない²⁹。無論、歴史の切れ目を実証的に検討すれば、古代はローマの「文明」をゲルマンの「野蠻」が一方向的に破壊して終わるものではなかったこと、近代は古典の「再発見」だけでなく中世の教会文化の「継承」に始まることは明らかだ。けれども、古代と近代を断絶する暗い谷間として

²⁹ 三分法は、17世紀末にドイツの歴史家クリストフ・ケラー(ツェラリウス)によって歴史記述に導入され、18世紀の啓蒙主義的歴史学のなかで少しずつ定着したといわれる(岡崎,1996,p.214-230)。19世紀以降、西欧内外での国民史叙述は、それに適応するものも反発するものも、この時代区分モデルを意識して展開すると考えられるが、そもそも「ルネサンス」概念の成立・伝播・変化の過程について、各国の史学史のなかで概括する必要があるが、これについては別稿を期する。

中世を捉える見方は、神の秩序に対して人間性や進歩を擁護する近代的発想と強く結びつく。

逆に考えれば、人間性や進歩の理念を信じられなくなれば、それまでの時代評価は一挙に反転するということでもある。ここで鈴木は論文「中世と現代」(初出不明)で以下のように述べる。

中世は近代を通じて二度否定せられ、また二度肯定せられたといふ歴史をもつてゐることが知られる。すなわち、中世はルネサンスと啓蒙とにおいて否定せられ、また反動改革と浪漫主義とにおいて肯定せられた。しかも一は中世を過度に暗黒化し、また一は中世を過度に理想化することによつて、その肯定と否定とのいずれの場合においても、近代人の中世に対する理解は、常に一面的であることをまぬかれなかつたのである。(鈴木 1941,p.251-252)

古代・近代と中世のどちらかを評価するのではなく、両者をネガ・ポジで捉える近代的な時代区分観それ自体を再検討すること。それが中世史家・鈴木による「近代の超克」であった。彼は最初の本のなかで、彼がゲルマン人の「民族大移動」をローマ帝国の破壊と略奪ではなく、それへの平和的な融合過程として捉えるため、中世を「ローマ風ゲルマン風世界」と呼んで、古代との歴史的連関性を強調した点でランケを賞賛していた。つまり「ゆうべの国＝ヨーロッパ Abendland」は、弱まっていくローマの権威のもとで、相互に独立しつつも関係しあうゲルマン諸民族国家が織りなす「世界」として生まれたのである。ランケに従えば従来の時代区分は以下のように考え直せる。

古代のギリシヤ風ローマ風世界に対照するときには、中世と近代とはその間を画する相違にもかかはらず実は同一の世界秩序に属するものであることが知られる。中世と近代とは之を古代に対し広義の近代として包括することができる」(鈴木,1939,p.134)

鈴木にとって、中世とは古代と近代を隔てる壁ではなく、それらをつなげる媒介なのである。しかも1000年以上にまたがる「広義の近代」はのっぺりしたものではなく、なかでそれぞれ異質な波が何度もうごめいている。中世的精神の本質は「自然と超自然、此岸と彼岸とを調和せしめ統一づけるところの統一的秩序そのもの」に存在するという(鈴木 1941,p.250)。鈴木は、「統一」が失われた(狭義の)「近代」の後に来たるべき時代を、そして「古き中世」への回帰とは異なる原理をもつとする時代を、「新しき中世」と呼んでいる(鈴木 1941,p.266)。

だが、「中世」にせよ「広義の近代」にせよ、ある時代のみがもつ実効的 Positive な力を捉えるには、その前の時代との接続性を考えねばならない。鈴木はその方法を論文「アウグスティヌスとその時代」(1937)で明らかにしている。まず、「来らんとする時代」(近代)の起源を中世に求めるやり方を、中世がもつ独自の価値を近代に従属させるとして批判する。一方、古代から中世を見るやり方は、ローマ没落史観というかたちで、中世の価値を古代に従属させる語りに陥ってしまう。鈴木はそこで「既存のもの」の「陳旧化 Alterung」を歴史的課題として取り上げ、そうした「末期的現象」を消極的 Negative な意味づけ(没落史観)と切断して捉えるべきだとする(鈴木,1937,

p.4-5)。すなわち、古代が過ぎ去って中世が来ようとする、はざまの時代を、それ固有の独立した構造をもった場として考えることで、中世の起源へと向かう動きを追うのである。この論文では、「神の国」と「地の国」の「二つの世界を調和せしめ」た中世思想の先駆者ではなく、まだ統一も安定もしていない教会と世俗を背景に「その最も深き内面的対立において認識し表現した」、古代末期という特有の場に発する精神として、アウグスティヌスを位置づけている(鈴木,1937, p.36)。

このように、古代にも近代にも従属させずに、また歴史的発展のなかで中世の起源を捉えるため、鈴木は古代・中世転換期を研究対象として選んだ。彼にとって、歴史における事物の起源とは、静止した点ではなく動く極限であるという点に注意しておきたい。そこでは存在に近似しつつも存在にはなっていない「非(未)存在 Noch-nicht- Sein」こそが、断絶しつつ連続する歴史において存在同士をつなぎうるという(鈴木, 1937, p.4)。アウグスティヌスも「未だ成らぬ存在」のひとりに数えられる。鈴木の世界意識は、19世紀的「近代」が過ぎ去りつつあり、「新しき中世」が来らんとする、はざまの時代として20世紀中葉＝「現代」を捉えるあり方とも無関係ではなからう。

(2) 「西洋」の内なる「オリエント」へ

以上のような視点から鈴木はいかなる「ヨーロッパ」を描こうとしたか。1943-44年に執筆され、戦後に公刊された論文「ヨーロッパの成立」(1947年初出)は、ここまでで論じた古代・中世接続をめぐる問題を様々な学説を検討した上で、3-10世紀のヨーロッパ史の流れを描いている。まず、「ヨーロッパ」とは地理・人種・政治的条件で一義的に規定されるものでなく、歴史のなかで変容してきた文化的概念であり、内部には政治的な分裂と精神的な統一を同時に含むような「世界」であるという前提が示される。次に「地中海世界」から「ヨーロッパ世界」への移行について、両者の社会体制の異質性(ボリス的秩序の崩壊・ヨーロッパの地中海からの孤立と自給経済の成立)を取り上げ、同時に両者の継続性を強調して叙述している(鈴木,2000,p.6)。

第一に注目すべきは、ローマ帝国末期から存在感を見せるゲルマン人の役割を重視する点である。彼らの活動は略奪のイメージとは異なり、実際には奴隷・傭兵・農奴の三段階を経て長期にわたって帝国に平和裡に定住していったのだと説明される。375年の西ゴート族たちの「大移動」以降、ローマ帝国内にゲルマン民族による諸国家が成立する過程についても、鈴木は後者による前者の篡奪とは考えず、ふたつの異なる構造をもった国家が並存しあう状況ができたと説明する。つまり、より上位の権威をもって加盟国に市民権を付与することのできる「世界(Federati)国家」としてローマ帝国があり、これに特定の民族集団による政治体として「民族(Stamm)国家」が参加することで、地中海地域には二重の権力構造が生まれる。それは、多元的な政治権力が拮抗しつつ、統一的理念を共有する、いわば「ヨーロッパ的世界」の祖型であった(鈴木,2000,p.74-80)。

鈴木はローマ帝国末期のゲルマン人への強い関心は学生時代から継続している³⁰。だが、ここで興味深いことに、専門的な歴史研究で得られた過去の知見は、戦争協力の場におかれた瞬間、歴史の当事者として現在―未来を捉える展望へと反映されるのだ。鈴木は海軍との勉強会で、ローマ帝国とゲルマン諸民族の関係性を、日本帝国と「同盟国」(満洲国およびタイ王国)のそれに喩えている。

ローマ末期の *federate Staaten* とその日本の現状との類似性と相異性盟協なる言葉はローマ末期に類似したものがある。*federate Staaten* がそれ、=ゲルマン人の平和的侵入形態、三七八年西ゴートが入ってから画期的に出来たもの、ローマの中に *Staat im Staate*【引用者注:国家内国家】を多く造る。即ち *nationaler Staat*【同:民族国家】といふ中間段階を *Roma* の中に認め、例へばゲルマンの *König*【同:国王】はゲルマン的性格とローマ的性格の *Doppelheit*【同:二重性】をもつ。ゲルマン各国は *Roma* の *Authorität*【同:権威】を認めてゐたのであって、その *Idee* がのちにカールの神聖ローマ帝国復興をも可能ならしめたのである。(大橋,2001,p.186)

その実態はさておき、「大東亜共栄圏」では参加国が互いに自立した国家でありながら、同時に日本が諸国家をゆるやかに指導する。「帝国 *Imperium*」と同じく、戦局の進行によって「共栄圏」の母体が消滅しようとも、その理念が長く継続し、広く浸透することまで鈴木は想像していたとすれば、それはひとりの西洋史家が育てあげた「新しき中世」の想像力が発露した瞬間にほかならない。

第二のポイントが、「オリエント」への視点である。ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌ(1862-1935)は『マホメットとシャルルマーニュ *Mahomet et Charlemagne*』(1937)において、イスラム勢力による地中海の制圧によって、他の地域から閉ざされたからこそ、西欧は古代世界から経済・文化的に脱却し、独自の世界を形成したというテーゼを展開し、学界で激しい議論を巻き起こしていた(マホメットなくしてシャルルマーニュなし)。ピレンヌ説に深く感銘を受けた鈴木は、ヨーロッパの成立史を以下のように見直そうとしていた。

従来西洋史学は古代・中世の転換をば専らローマ風ゲルマン風世界の成立過程として究明し来たった。換言すればすなわち専ら欧州史的視野において究明してきたのである【引用者注:中略】ただしかし吾々は今日、この問題をば単に欧州史的視野においてのみならず更に世界史的視野の下において、これを東洋と西洋との分裂の過程として究明すべき段階に立つたのではないのであろうか(鈴木,2000,p.43)

³⁰ 20代半ばに出版した論文「テオドリッヒのイタリア支配」にて、5世紀末、東ゴート王国を築き、かつての(西)ローマの理念を継承するビザンツ帝国に従いつつも、ローマ教会の権威を認めなかったテオドリッヒの後ろに、古代にも中世にも属さない特有の場を、鈴木は見出している(鈴木 1931)。

つまり、古代の終焉においては、新しい「オクシデント」の勃興ではなく、「オリエント」の優越こそが問題であるとすれば、476年の西ローマ帝国の「滅亡」は事実ではあれども、鈴木にとっては決定的な意味をもたない。3世紀の帝国分裂後、やがて政治・経済・文化の重心が「オリエント」へと移っていき、後のビザンツ帝国がなおもコンスタンティノープルを都に「世界帝国」を維持していくからである(鈴木,2000,p.89ff)。しかも、この「オリエント」は、「西洋」の前段階として乗り越えられるものではなく、それ自体が「オクシデント」から自律して、数千年の歴史をつくってきた「世界」である。そして、アケメネス朝ペルシャに対してはギリシャの諸都市が、ササン朝ペルシャに対してはローマ帝国が立ち向かい、そして東西キリスト教がそれぞれ相異なる教義・組織・精神生活をつくっていくように、「オクシデント」の働きかけが「オリエント」の形成に貢献していった。

ただし鈴木は、ふたつの世界の断絶を一方向的に強調するのではなく、9-10世紀にイスラム文化が科学知識や哲学において、「東西」の融合を進めたという側面にも注意を向け、「吾々はオリエントそのものの形成に対して与えたヨーロッパの役割をも無視することは出来ないのである」と結論づけている(鈴木,2000,p.109)。

ここで注目すべきは、鈴木が自らの歴史叙述で「東洋／西洋」の概念を用いる方法である。彼は「ヨーロッパ」という概念の構築性に注意して、具体的な史実の配置やそれらへの照射のあり方を変えることで、「オクシデント」の歴史の流れにとどまりつつ、「東洋＝オリエント」を主体化させようとしている。鈴木を試みは、重厚な史料読解にもとづき、特定のテーマを探究するような「モノグラフ」に帰結しなかったし、今日では特段、新鮮さを与えるわけでもない。それにもかかわらず、それは同時代の海外学界と並走、もしくはその先を行くものであったといえよう。当時のヨーロッパでなお有力であった「ローマの滅亡」という悲観的・消極的な歴史像に挑戦すべく、1930年代からフランスのアンリ＝イレネ・マルー(1904-1977)たちが、また1970年代には合州国のピーター・ブラウン(1935-)が「古代末期 *antiquité tardive* / *late antiquity*」の概念によって、3-8世紀を独自の意義をもった時代として捉えようとした。そこには、ペルシャといったローマ帝国の外に広がる地域を含め、文化多元的な視点から歴史を描き直すという意図もあったという(南雲, 2020, p.18ff)。生きる時代や立場は異なり、戦時中は情報交換が制限されたにもかかわらず、鈴木は時空を越えた同学の士たちと「古代末期論」という同じ山を登っていたのである。

おわりに

「反西洋」や「超近代」の声がこだまするなか、島に閉じ込められた西洋学者は何をなすべきか。それでも只管に「ヨーロッパとは何か」を問い続けることに違になかろう。だが、問題はその方法である。例えば、日本人はまず、〈西洋＝近代〉をしっかりと学ぶところからはじめよと、「近代の超克」座談会に冷や水をかけ、フランス文学の研究に勤しんだ批評家・中村光夫の姿勢は、ひとつの模範であろう。だが、それとは異なり、「近代」をいったん括弧に入れ、「西洋」への問いにこだわるこ

とで、〈西洋＝近代〉を批判的に捉えかえす思考実践がありえたことを、我々は鈴木成高という西洋中世史家の経験から明らかにすることができた。

鈴木は哲学者たちに専門知識を提供するだけの受動的存在ではない。自らを取り巻く国内外の情勢のなかで、ランケを通じて近代歴史学のあり方を見直し、そこで得た「西洋中心主義」をめぐる問題について哲学者との激しい議論を交わして、自らの学問を実践した。それは、専門領域に籠城するものでも、前近代(中世)を礼賛するものでも、ましてや西洋趣味に逃避するものでもなかった。鈴木が引き受ける「西洋中心主義」の視点は、「非ヨーロッパ」あるいは「反近代」に紐づけられた「東洋＝アジア」を外から投げつけるような議論とは相容れず、むしろ彼らの議論の限界を浮き彫りにする。その点で「近代の超克」論では独自の批判性をもっていた³¹。

確かに、鈴木(および京都学派四天王たち)たちには、中国や東南アジア諸国への理解(あるいは関心)が不足していたことは否めず、それは洋風の「教養」で育まれた大正世代の日本知識人の抱える問題であった³²。そのため、彼らのほとんどは、当時の日本が置かれた政治＝経済的な条件、あるいは「東洋」との精神的距離を深慮しないまま、自らを「東西融合」の主体となすような、それゆえに破綻を約束された思考に陥ってしまった。

その意味で、酒井直樹が高山岩男について、「『世界史の哲学』の哲学者たちは、日本は西洋の外にあるのではないと言う事実に対して決定的に盲目であった」し、「日本との関係において西洋を批判するためにはまず日本の批判から始めなければならない」と述べるのは正しい(酒井, 2015, p. 75)³³。それに対して中国文学者・竹内好(1910–1977)は、「アジア」にとしての「近代」を、「西洋」への服従と反作用の激しい歴史的経験をもつ「中国」の視座から把握することで、日本社会の道筋を新たに位置づけようとする「方法としてのアジア」を、戦時中から試みていた。それは戦後日本で再び優勢となる、イギリスやフランスの「近代」をモデル化して日本社会を批判する「方法としての西洋近代」(丸山眞男・大塚久雄など)への対抗物として位置づけられよう。

とすれば、両者のいずれをも退け、「(新しき)中世」の視座から、「西洋」のはじまりに「オリエン」を見出し、当時も支配的だった「古代」像をひっくり返すことで、〈西洋＝近代〉を超克しようとする試みこそ、鈴木独自の「近代の超克」にほかならない。鈴木「方法としての西洋(中世)」は、

³¹ ここで確認したいのは、非人間的な敵としてイメージされる「西洋像」、つまりブルマやマルガリートが「オクシデンタリズム」と定義するものは、ドイツのロマン派知識人によるフランス革命(理性主義)批判から生まれ、ロシアや中東、そして東アジアへと拡散したという(ブルマ&マルガリート, 2006)。彼らの著書の副題「その敵の眼に映る西洋 the West in the eyes of its enemies」とはそもそも、「西洋 Occident」内部にしながら「東方 Orient」たらざるをえない、いわば「オクシデントにおけるオリエン」が無限に生成されるなかで展開していく現象だと言えよう。

³² 彼らは歴史の動きを(単一)民族の単位で捉えようとするあまり、多民族国家である合州国への理解を欠き、合州「国民」の「道義的生命力」を軽んじてしまったという坂本多加雄による指摘も重要である。(坂本, 1994, p. 225f)。

³³ 20世紀の日本の特殊性は、西洋の普遍性に位置づけられることではじめて獲得されるという点で、「特殊主義」(ナショナリズム)と「普遍主義」(インターナショナリズム)は実はコインの面裏であると酒井は論じる(酒井, 2015, p. 59ff)。日本と朝鮮の史学史的経験から、「西洋史」という知的枠組それ自体が、この論理のもとに(戦後はマルクス主義の姿を取って)近代化と国民国家の強化に奉仕する機能を果たしたというイムのテーゼは、本論にとっても重要である(イム, 2015)。

「西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す」(竹内 1993, p.469)という、戦後日本でいったん消し去られた目標に接近する、もうひとつの可能性を確かに示しているのだ³⁴。

鈴木 of 思想と実践は日本敗戦後も続いていく。東西陣営の対立と核時代の到来を前に、彼は民族・国民国家・イデオロギー・技術による分断を乗り越えるべく、「人格の復活」を掲げ、さまざまな場で教育・啓蒙・評論・研究を続けた。こうした活動のなか、鈴木 of 「方法としての西洋」が1950年代以降の世界史のなかでいかに展開されていくかは、今後の課題としたい。

<引用文献>

- イム・ジヒョン, 2015, 「国民史の布石としての世界史——日本と朝鮮における「愛国的世界史」と、その結果として生じるヨーロッパ中心主義について」『思想』1091号
- 岩井淳, 2014, 「コモンウェルス概念の史的変遷」山本正・細川道久編『コモンウェルスとは何か——ポスト帝国時代のソフトパワー』ミネルヴァ書房
- 上原専禄, 1960, 『日本国民の世界史』岩波書店
- 植村和秀, 2007, 『「日本」への問いをめぐる闘争——京都学派と原理日本社』柏書房
- 大橋良介編, 2004『京都学派の思想——種々の像と思想のポテンシャル』人文書院
- 大橋良介, 2001, 『京都学派と日本海軍——新史料「大島メモ」をめぐる』PHP 研究所
- 岡崎勝世, 1996, 『聖書 vs. 世界史——キリスト教的歴史観とは何か』講談社
- 小川浩之, 2012, 『英連邦——王冠への忠誠と自由な連合』中央公論新社
- 河上徹太郎編, 1979, 『近代の超克』富山房
- 京都大学西洋史研究室編, 1982『読書会大会五十年の歩み』(非売品)
- 京都大学文書館編, 2006『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書 第二巻』(非売品)
- 高坂正顕ほか, 1942『世界史的立場と日本』中央公論社
- 高山岩男, 1939, 『文化類型学』弘文堂書房
- , 1941, 「世界史の種々の理念——鈴木成高氏の批評に答ふ」『理想』120号
- (花澤秀文編), 2001, 『世界史の哲学』こぶし書房
- 小山哲, 2016, 「実証主義的「世界史」」秋田茂他編著『「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房
- 昆野伸幸, 2013, 「日本主義と皇国史観」苅部直ほか編『日本思想史講座5——方法』ぺりかん社
- 酒井直樹, 2015(初出1996), 「近代の批判: 中絶した投企——日本の一九三〇年代」『死産される日本語・日

³⁴ なお、文化事業としての隠れた鈴木 of 役割も重要である。例えば、京大辞職後、創文社の顧問として、ピレンヌやホイジンガ、クリストファー・ドーソンたちが著した非マルクス主義的な西洋文化史の著作を翻訳するよう働きかけた。また同社『現代史講座』の執筆者たちを集めて座談会を開き、その内容を『戦後日本の動向(現代史講座別巻)』(1954)として出版する。そこでは後に「革新」陣営に分類される丸山眞男や上原専禄、都留重人らが、「保守」に分類される鈴木 or 竹山道雄と席を共にして興味深い。さらにスペインの知識人でオルテガの弟子である哲学者のディエス・デル・コラルを招聘し、著書『歴史の運命と進歩』(未来社、1962年)などを翻訳するなど、海外との文化交流にも貢献した。

- 本人——「日本」の歴史—地政学的配置—』講談社
- 酒井直樹&磯前順一編, 2010, 『「近代の超克」と京都学派——近代性・帝国・普遍性』以文社
- 坂口昂, 1932, 『独逸史学史』岩波書店
- 坂本多加雄, 1994(初出 1990), 「日本は自らの来歴を語りうるか——「世界史の哲学」とその遺産」『日本は自らの来歴を語りうるか』筑摩書房
- 島田智子, 2006, 「鈴木成高研究への緒言——戦後の著作における「近代」の「超克」」『関西大学西洋史論叢』9号
- 菅原潤, 2011, 『「近代の超克」再考』晃洋書房
- 鈴木成高, 1931, 「テオドリッヒのイタリア支配」『史林』16号4巻
- , 1937, 「アウグスティヌスとその時代」『史林』22号4巻
- , 1939, 『ランケと世界史学』弘文堂書房
- , 1941, 『歴史的國家の理念』弘文堂書房
- , 1942, 「「近代の超克」覚書」『文学界』9巻(1942年10月号)
- , 1948, 『封建社会の研究』弘文堂
- , 1990, 『世界史における現代』創文社
- , 2000, 『ヨーロッパの成立・産業革命』燈影社
- 鈴木成高&林健太郎, 1974, 「対談:ランケ史学の心髄」『世界の名著ランケ』中央公論社(附録)
- 関智英, 2019, 『対日協力者の政治構想——日中戦争とその前後』名古屋大学出版会
- 竹内好, 1993(初出 1961), 「方法としてのアジア」『日本とアジア』筑摩書房
- 土肥恒之, 2012, 『西洋史学の先駆者たち』中央公論新社
- 鳥山成人, 1964, 「ロシア史への私の歩み」『ロシア史研究』4号3巻
- 中島岳志, 2013, 「京都学派の遺産——鈴木成高における世界史の哲学と戦後保守」酒井哲哉編『外交思想』岩波書店
- 南雲泰輔, 2020, 「西洋古代史の時代区分と「古代末期」概念の新展開」『思想』(岩波書店)1149号
- 花澤秀文, 1999, 『高山岩男——京都学派哲学の基礎的研究』人文書院
- 羽田正, 2011, 『新しい世界史へ』岩波書店。
- ヒューズ, スチュアート(生松敬三・荒川幾男訳), 1970(原書 1958), 『意識と社会——ヨーロッパ社会思想1890-1930』みすず書房
- 廣松渉, 1989(初出 1980) 『「近代の超克」論』講談社
- ブルマ, イアン&マルガリート, アヴィシャイ(堀田江理訳), 2006(原書 2004), 『オキシデンタリズム』新潮社
- 牧野雅彦, 2003 『歴史主義の再建』日本評論社
- 丸山眞男, 1961 『日本の思想』岩波書店
- 米原謙, 2007 『日本政治思想』ミネルヴァ書房
- Iggers, Georg G., Wang, Q. Edward, Mukherjee Supriya, 2016, *A Global History of Modern Historiography (2nd ed.)*, London & New York, Routledge

Novick, Peter, 1998, *That Noble Dream: The "Objectivity Question" and the American Historical Profession*, Cambridge University Press

Williams, David, 2004, *Defending Japan's Pacific War: The Kyoto School philosophers and post-White power*, Routledge Curzon, London & NewYork

Williams, David, 2014, *The Philosophy of Japanese Wartime Resistance: A reading, with commentary, of the complete texts of the Kyoto School discussions of "The Standpoint of World History and Japan"*, Routledge, London & NewYork,

吉川弘晃(よしかわ・ひろあき)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程在籍。日本学術振興会特別研究員(DC1)を経て、オックスフォード大学日産日本研究所訪問学生(23年3月時点)。忘却されてきた国境や領域を越えた出来事(主に日・露・欧)の発掘を通して、〈近代/日本〉の構想力としての〈西洋意識 Occidentalism〉の生成史を探究している。
schwarzerpanther634@ybb.ne.jp